

第1部 食肉の流通

1 肉畜の出荷及び枝肉生産の動向

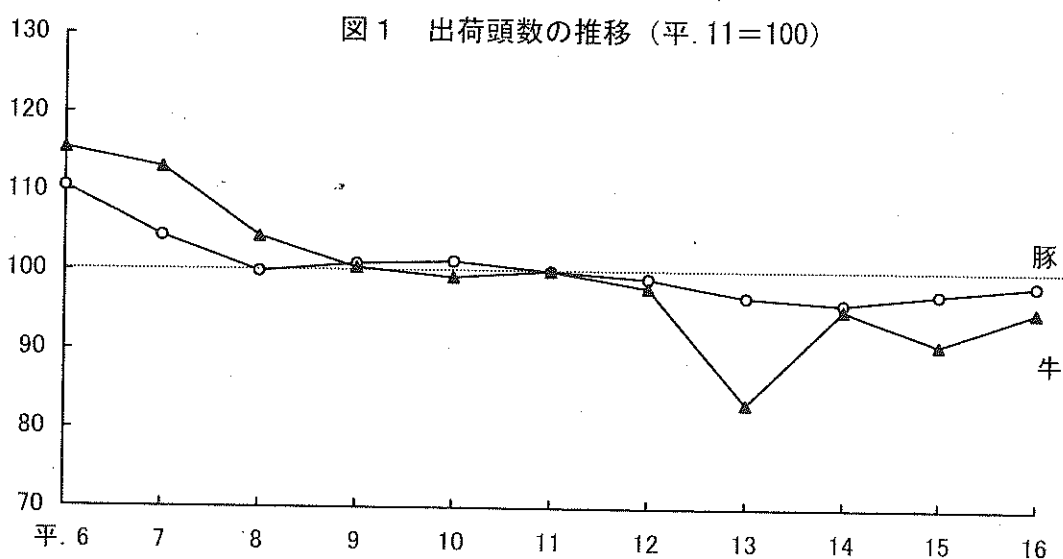
(1) 肉畜の出荷(と畜)頭数をみると、豚は1,659万6千頭で前年に比べ1.2%増加した。牛は126万6千頭で前年に比べ4.7%増加した。

また、馬は1万9千頭、めん羊は4千頭で前年に比べそれぞれ1.2%、9.6%増加した。やぎは4千頭で前年に比べ9.6%減少した。

表1 肉畜出荷頭数の推移

年次		豚	牛			馬	めん羊	やぎ
			計	成牛	子牛			
実数	平.11	16 872	1 332	1 322	10	19	4	6
	12	16 717	1 304	1 297	6	18	4	6
	13	16 329	1 109	1 103	5	18	4	5
	14	16 183	1 268	1 263	5	18	4	4
	15	16 396	1 210	1 202	8	19	4	4
	16	16 596	1 266	1 256	10	19	4	4
対前年比	平.11	98.8	100.8	100.9	92.1	92.4	89.3	104.4
	12	99.1	97.9	98.1	66.3	96.5	80.2	108.9
	13	97.7	85.1	85.1	83.8	97.4	110.1	84.4
	14	99.1	114.3	114.4	88.9	102.3	92.1	81.6
	15	101.3	95.4	95.2	164.1	104.9	98.9	89.3
	16	101.2	104.7	104.5	128.9	101.2	109.6	90.4

単位 { 実数：千頭
比率：%



(2) 食肉の生産量(枝肉総生産量)は179万3千tで、前年に比べ1.7%増加した。このうち、豚肉は127万2千tで前年に比べ1.0%増加し、牛肉は51万2千tで前年に比べ3.3%増加した。

生産量に占める肉畜別の構成割合をみると、豚肉は0.5ポイント低下し70.9%となった。一方、牛肉は0.5ポイント上昇し28.6%となった。

表2 食肉(枝肉)の生産量の推移

単位 { 実数:千t
比率:%

年次	計	豚肉	牛 肉				その他	
			小計	和牛	乳牛	他の牛		
実数	平.11	1 825	1 277	540	240	290	10	8
	12	1 808	1 271	530	236	289	6	7
	13	1 707	1 242	459	206	248	5	6
	14	1 780	1 236	537	217	314	5	7
	15	1 764	1 260	496	188	301	6	8
	16	1 793	1 272	512	191	314	8	8
対前年比	平.11	100.1	99.3	102.1	99.5	104.0	114.7	93.7
	12	99.1	99.5	98.1	98.4	99.4	56.0	98.5
	13	94.4	97.7	86.5	87.0	86.1	84.2	85.1
	14	104.3	99.5	117.0	105.7	126.4	114.6	114.0
	15	99.1	102.0	92.4	86.8	96.0	113.8	105.2
	16	101.7	101.0	103.3	101.3	104.1	129.8	110.9
構成比	平.11	100.0	70.0	29.6	13.2	15.9	0.5	0.4
	12	100.0	70.3	29.3	13.1	16.0	0.3	0.4
	13	100.0	72.8	26.9	12.0	14.6	0.3	0.4
	14	100.0	69.4	30.2	12.2	17.6	0.3	0.4
	15	100.0	71.4	28.1	10.7	17.1	0.3	0.4
	16	100.0	70.9	28.6	10.6	17.5	0.4	0.5

注:その他は、馬、めん羊、やぎである。

2 と畜場の状況

全国のと畜場数は204場で、前年に比べ4場（1.9%）減少した。これは、廃業やと畜場の統合等があったためである。

と畜場の種類別と畜場数及び構成割合をみると、食肉卸売市場併設と畜場が13.2%、食肉センターが35.3%、その他が51.5%を占めている。

表3 種類別と畜場数の推移

単位 { と畜場数：場
比 率：%

区 分		計	食肉卸売市場 併設と畜場	食 肉 センター	そ の 他
実 数	平. 14	240	28	80	132
	15	208	27	72	109
	16	204	27	72	105
対 前 年 比	平. 14	94.9	100.0	97.6	92.3
	15	86.7	96.4	90.0	82.6
	16	98.1	100.0	100.0	96.3
構 成 比	平. 14	100.0	11.7	33.3	55.0
	15	100.0	13.0	34.6	52.4
	16	100.0	13.2	35.3	51.5

豚及び成牛のと畜頭数規模別と畜場数及びと畜頭数をみると、豚を処理したと畜場数は172場で、前年に比べ1.7%減少した。これをと畜頭数規模別にみると、10万頭以上の階層はと畜場数で37.8%、と畜頭数で78.6%を占めている。

また、成牛を処理したと畜場数は162場で、前年に比べ1.8%減少した。これをと畜頭数規模別にみると、1万頭以上の階層はと畜場数で27.8%、と畜頭数で66.7%を占めている。

表4 と畜頭数規模別と畜場数及びと畜頭数の推移

単位 { と畜場数：場
と畜頭数：千頭
構 成 比：%

区 分			豚					成 牛				
			計	2万頭 未 満	2～5	5～10	10万頭 以 上	計	1,000 頭未 満	1,000～ 5,000	5,000～ 1万	1万頭 以 上
と 畜 場 数	実 数	平. 14	211	78	40	28	65	172	44	45	39	44
		15	175	48	31	32	64	165	41	38	43	43
		16	172	44	32	31	65	162	37	38	42	45
と 畜 頭 数	実 数	平. 14	16 153	226	1 424	2 085	12 419	1 263	12	133	291	827
		15	16 396	189	1 070	2 368	12 770	1 202	11	110	306	774
		16	16 595	155	1 072	2 322	13 047	1 256	7	111	300	837
と 畜 場 数	構 成 比	平. 14	100.0	1.4	8.8	12.9	76.9	100.0	0.9	10.5	23.0	65.5
		15	100.0	1.2	6.5	14.4	77.9	100.0	0.9	9.2	25.5	64.4
		16	100.0	0.9	6.5	14.0	78.6	100.0	0.6	8.9	23.9	66.7

注：当該畜種の入場のあったと畜場のみの集計値である。

3 肉豚の概要

(1) 豚の出荷状況

豚の出荷（と畜）頭数は1,659万6千頭で、前年に比べ20万頭（1.2%）増加した。

平成11年（5年前）と比べると27万6千頭（1.6%）減少しており、また、この間の推移をみると、平成14年までは毎年前年を下回っていたものの、平成15、16年は前年を上回った。

図2 豚出荷（と畜）頭数の推移

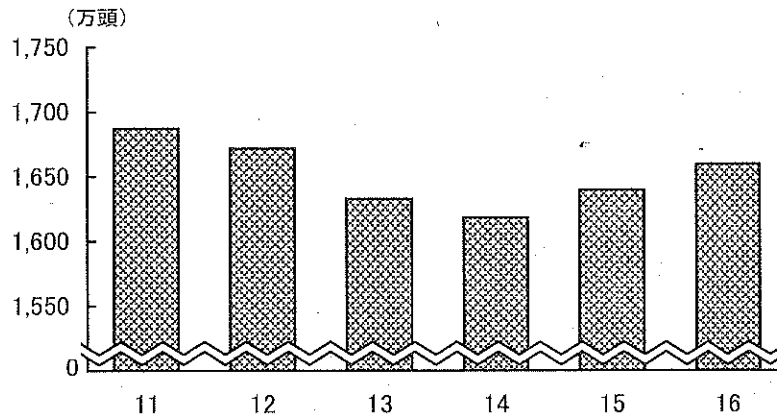
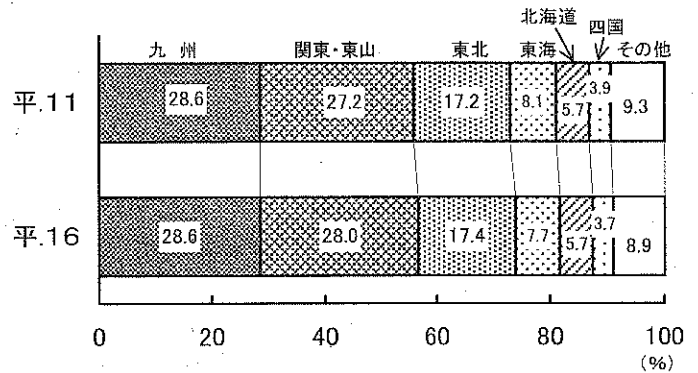


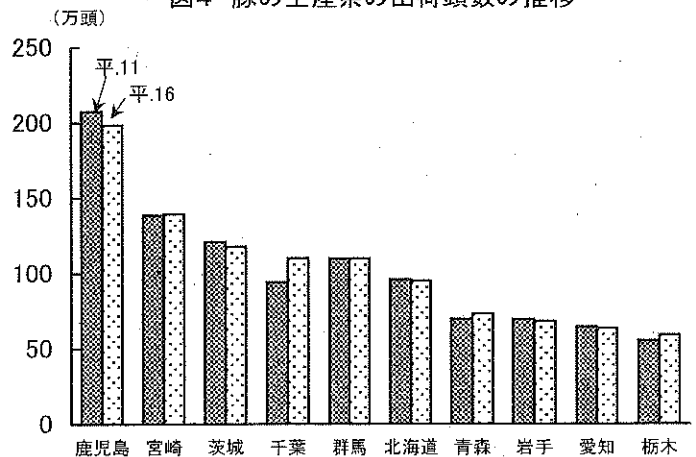
図3 豚出荷頭数の農業地域別割合の推移



豚の出荷頭数を全国農業地域別割合で見ると、鹿児島、宮崎を中心とする九州が28.6%（474万頭）を占めて最も高く、次いで、茨城、群馬を中心とする関東・東山が28.0%（464万頭）、青森、岩手を中心とした東北が17.4%（288万7千頭）を占めており、この3地域を合わせた割合は、平成11年に比べ1.0ポイント上昇し、74.0%となっている。

主産県の出荷頭数を、平成11年と比べてみると、宮崎、千葉、青森、栃木は増加したものの、鹿児島、茨城、北海道、岩手、愛知は減少している。

図4 豚の主産県の出荷頭数の推移



(2) 食肉卸売市場における豚肉の状況

ア 取引状況

食肉卸売市場(中央卸売市場10、指定市場19)における豚肉の取引成立頭数は228万9千頭で、前年並みであった。市場別では、中央卸売市場が96万8千頭で前年に比べ3.2%減少し、指定市場は132万1千頭で前年に比べ3.4%増加した。

全国のと畜頭数に占める食肉卸売市場取引成立頭数の割合は13.8%で、前年に比べ0.1ポイント低下した。

表5 食肉卸売市場の豚肉の取引成立頭数の推移

区 分		食肉卸売市場		
		中央卸売市場	指定市場	
実数	平. 14	2 283	985	1 298
	15	2 277	1 000	1 277
	16	2 289	968	1 321
対前年比	平. 14	102.8	102.7	102.9
	15	99.7	101.5	98.4
	16	100.5	96.8	103.4

単位 { 成立頭数：千頭
比 率：%

表6 全国と畜頭数に占める食肉卸売市場取引成立頭数の推移

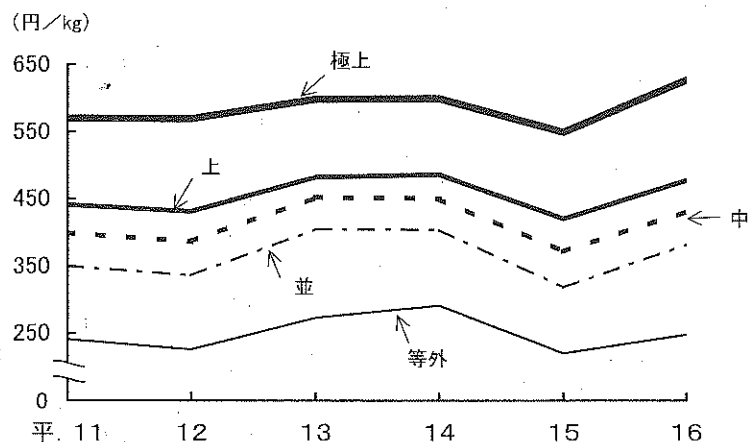
年 次	全国と畜頭数	食肉卸売市場	割 合	
			頭数：千頭	割合：%
平. 14	16 183	2 283		14.1
15	16 396	2 277		13.9
16	16 596	2 289		13.8

単位 { 頭数：千頭
割合：%

イ 卸売価格の動向

食肉中央卸売市場における豚肉の規格別卸売価格は、「極上」が626円(1kg当たり。以下同じ。)、「上」が477円、「中」が431円、「並」が382円、「等外」が248円となり、それぞれ77円(14.0%)、57円(13.6%)、60円(16.2%)、64円(20.1%)、28円(12.7%)上昇した。

図5 豚肉の規格別卸売価格の推移(1kg当たり平均価格)
(食肉中央卸売市場)



4 肉牛の概要

(1) 成牛の出荷状況

成牛の出荷(と畜)頭数は125万6千頭で、前年に比べ5万4千頭(4.5%)増加した。

このうち、和牛は46万4千頭、乳牛は77万3千頭で、前年に比べそれぞれ0.6%、6.5%増加した。

成牛の種類別出荷頭数割合をみると、和牛が37.0%で平成11年に比べ7.5ポイント低下したのに対し、乳牛は61.5%で平成11年に比べ7.9ポイント上昇した。また、その他の牛は1.5%で、平成11年に比べ0.4ポイント低下した。

図6 成牛の出荷(と畜)頭数の推移

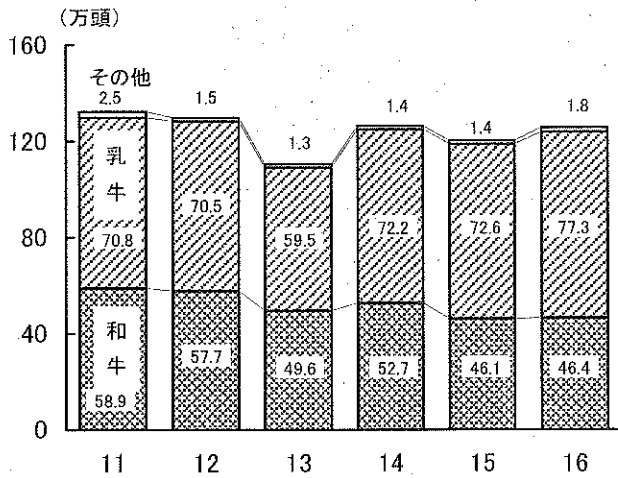
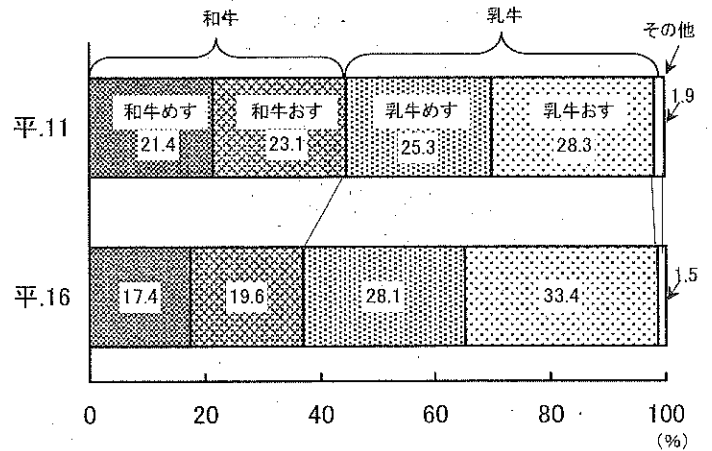


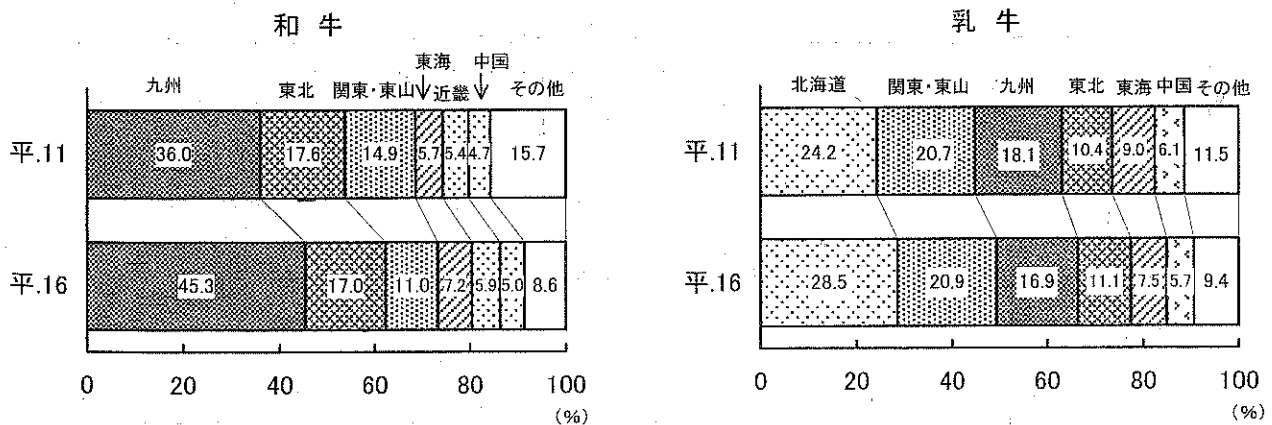
図7 成牛の種類別出荷頭数割合



成牛の出荷頭数を種類別に全国農業地域別割合でみると、和牛は、鹿児島、宮崎を中心とする九州が、平成11年に比べ9.3ポイント上昇し45.3%を占めて最も高く、次いで、宮城、岩手を中心とする東北が17.0%、群馬、茨城を中心とした関東・東山が11.0%となっており、この3地域を合わせた割合は平成11年に比べ4.8ポイント上昇し73.3%になった。

また、乳牛は、北海道が平成11年に比べ4.2ポイント上昇し28.5%を占めて最も高く、次いで、栃木、千葉を中心とする関東・東山が20.9%、熊本、宮崎を中心とする九州が16.9%となっている。

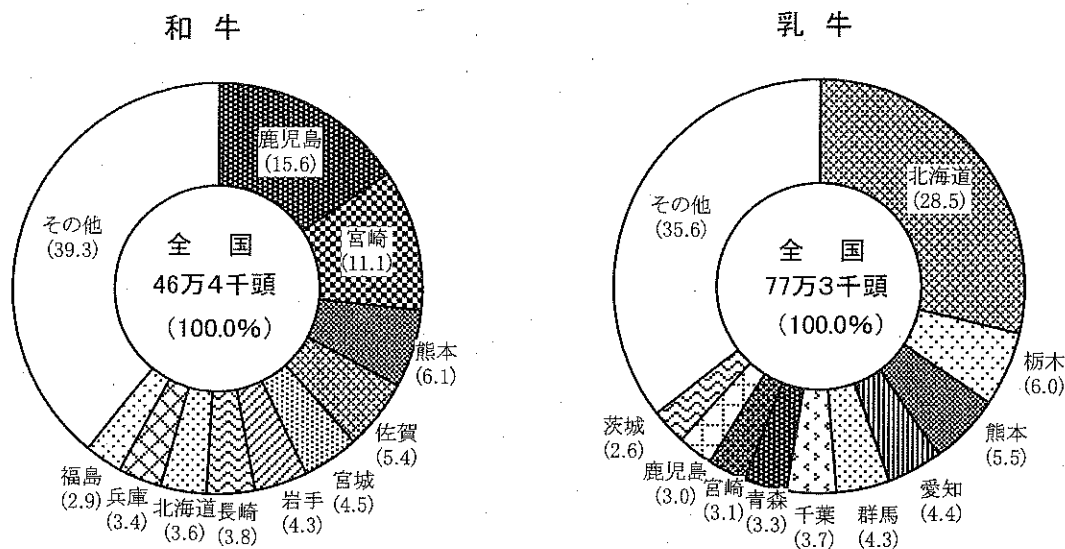
図8 成牛の種類別出荷頭数の農業地域別割合



都道府県別割合をみると、和牛は、鹿児島が15.6%を占めて最も高く、次いで、宮崎が11.1%、熊本が6.1%、佐賀が5.4%となっている。

また、乳牛は、北海道が28.5%を占めて最も高く、次いで、栃木が6.0%、熊本が5.5%、愛知が4.4%となっている。

図9 成牛の種類別出荷頭数の都道府県別割合



(2) 食肉卸売市場における牛肉の状況

ア 取引状況

食肉卸売市場（中央卸売市場10、指定市場19）における成牛の取引成立頭数は45万2千頭で、前年に比べ5.4%増加した。市場別では、中央卸売市場は33万5千頭、指定市場は11万7千頭で、それぞれ前年に比べ5.6%、5.0%増加した。

畜種別では、和牛は19万7千頭、乳牛は25万2千頭で、それぞれ前年に比べ2.5%、6.9%増加した。

全国のと畜頭数に占める食肉卸売市場取引成立頭数の割合は36.0%で、前年に比べ0.3ポイント上昇した。

表7 食肉卸売市場の牛肉の取引成立頭数の推移

区分	食肉卸売市場	中央卸売市場	指定市場	畜種別			
				和牛	乳牛	その他の牛	
実数	平. 14	481	343	138	227	254	0
	15	429	317	111	192	236	1
	16	452	335	117	197	252	3
対前年比	平. 14	114.5	116.8	109.3	89.4	153.0	65.4
	15	89.2	92.6	80.7	84.7	93.0	300.3
	16	105.4	105.6	105.0	102.5	106.9	304.9

単位 { 成立頭数：千頭
比率：%

表8 全国と畜頭数に占める食肉卸売市場取引成立頭数の推移

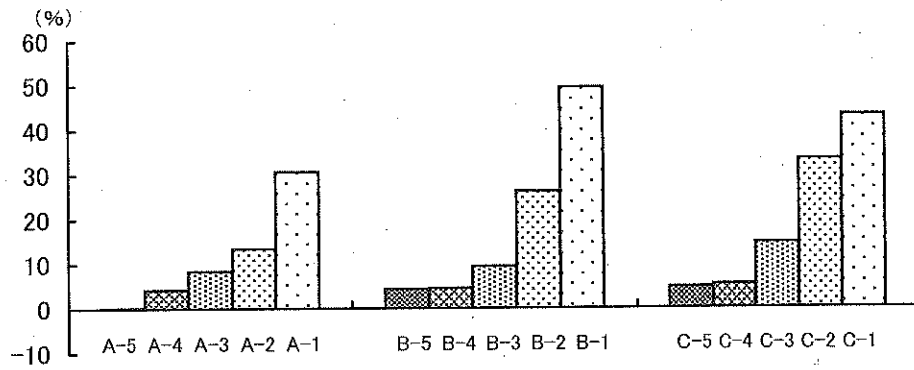
単位 { 頭数：千頭
割合：%

年次	全国と畜頭数	食肉卸売市場	割合
平. 14	1 263	481	38.1
15	1 202	429	35.7
16	1 256	452	36.0

イ 卸売価格の動向

食肉卸売市場における牛肉の規格別卸売価格を対前年騰落率で見ると、米国産牛肉の輸入停止措置の影響等により、すべての規格において上昇している。

図10 成牛の規格別取引価格の対前年騰落率



第2部 鶏卵の流通

1 鶏卵生産量

鶏卵生産量は249万1千tで、前年に比べ1.5%減少した。

都道府県別割合をみると、茨城が7.0%（17万5千t）を占めて最も高く、次いで、鹿児島が6.6%（16万4千t）、千葉が6.4%（15万9千t）、愛知が5.2%（12万9千t）となっている。

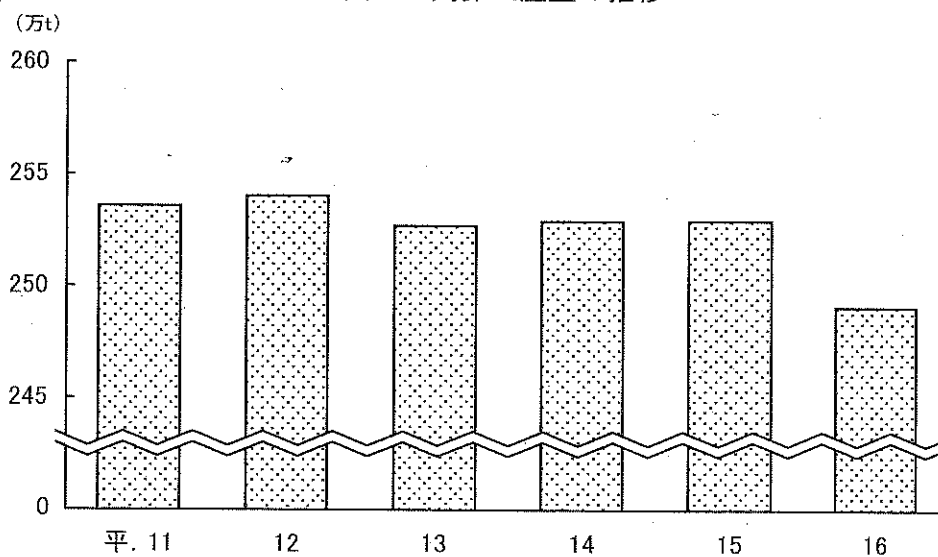
表9 主要都道府県別鶏卵生産量

区 分	生 産 量		対前年比	平.16 構成比
	平.16	15		
全 国	2 491	2 529	98.5	100.0
茨 城 1	175	169	103.6	7.0
鹿 児 島 2	164	173	94.8	6.6
千 葉 3	159	144	110.4	6.4
愛 知 4	129	132	97.7	5.2
広 島 5	111	110	100.9	4.5
北 海 道 6	103	109	94.5	4.1
岡 山 7	99	91	108.8	4.0
青 森 8	88	95	92.6	3.5
新 潟 9	83	64	129.7	3.3
兵 庫 10	82	88	93.2	3.3
そ の 他	1 296	1 355	95.6	52.0

単位 { 生産量：千t
比率：%

注：1)都道府県名の数値は、生産量の都道府県別順位である。
2)ラウンドにより計と内訳は一致しない。

図11 鶏卵生産量の推移



2 鶏卵の出荷状況

鶏卵出荷量は、241万2千tで、前年に比べ1.7%減少した。

これを全国農業地域別割合で見ると、千葉、茨城を中心とする関東・東山が最も多く、出荷量の24.1% (58万t) を占めている。次いで、鹿児島、福岡を中心とする九州が16.0% (38万5千t)、愛知、岐阜中心の東海が13.4% (32万3千t)、青森、宮城中心の東北が13.3% (32万1千t) となっている。

表10 鶏卵の全国農業地域別出荷量

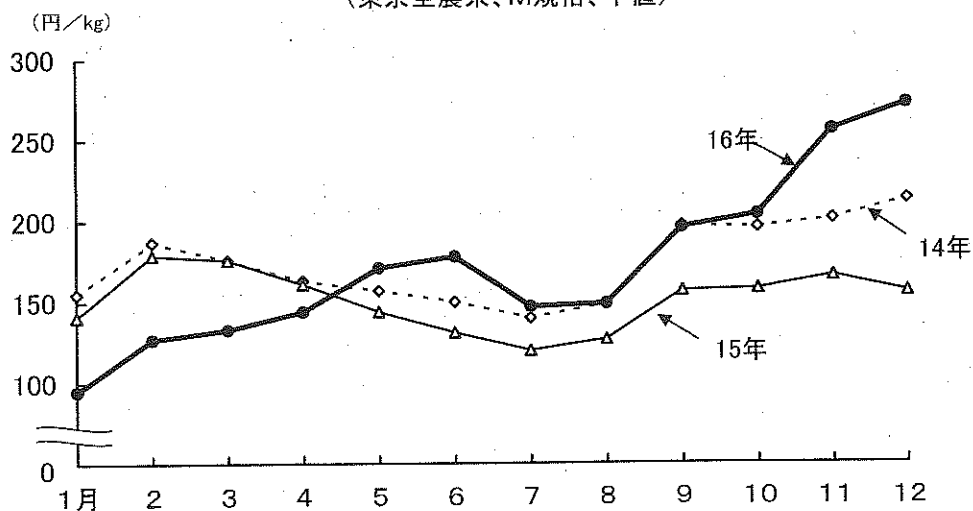
区 分	出 荷 量		対前年比	平.16 構成比
	平.16	15		
全 国	2 412	2 454	98.3	100.0
北 海 道	102	108	94.4	4.2
東 北	321	333	96.4	13.3
北 陸	134	120	111.7	5.6
関 東・東 山	581	570	101.9	24.1
東 海	323	334	96.7	13.4
近 畿	132	145	91.0	5.5
中 国	276	272	101.5	11.4
四 国	136	137	99.3	5.6
九 州	385	416	92.5	16.0
沖 縄	22	21	104.8	0.9

単位 { 生産量：千t
比率：%

注：ラウンドにより計と内訳は一致しない。

(参考) 卸売価格 (鶏卵市況情報)

図12 鶏卵卸売価格の推移
(東京全農系、M規格、中値)



第3部 食鳥の流通

1 食鳥の処理量

食鳥処理羽数及び重量は、年当初に高病原性鳥インフルエンザの発生があったものの、処理羽数は6億8,720万羽で前年に比べ1.7%減少にとどまり、一方、処理重量は184万300tで前年並みとなった。

表11 全国の食鳥処理量・製品生産量（平成16年）

単位 { 処理羽数 : 千羽
重量 : t
製品生産量 : t
比率 : %

区 分	処 理 量 (生 体)				製 品 生 産 量						
	実 数		対 前 年 比		実 数			対 前 年 比			
	羽 数	重 量	羽 数	重 量	計	と 体・ 中 ぬ き	解 体 品	計	と 体・ 中 ぬ き	解 体 品	
計	687 199	1 840 300	98.3	99.9	1 087 762	96 203	991 559	100.6	98.1	100.9	
ブロイラー	589 957	1 656 554	99.1	100.7	992 462	63 258	929 204	101.0	90.4	101.8	
その他の肉用鶏	8 388	25 530	90.0	90.2	14 806	4 389	10 417	91.0	92.8	90.2	
鷹 鶏	86 193	153 111	93.8	94.0	77 947	27 872	50 075	97.8	123.0	87.8	
その他の食鳥	2 661	5 105	97.3	98.0	2 547	684	1 863	99.2	95.0	100.8	

(1) ブロイラー

ア 処理羽数は5億8,996万羽で前年に比べ0.9%減少したものの、処理重量は165万6,554tで前年に比べ0.7%増加した。

また、出荷戸数は3,240戸で前年に比べ2.5%減少したものの、1戸当たり出荷羽数は18万2千羽で1.7%増加した。

表12 ブロイラーの出荷戸数・羽数及び1戸当たり出荷羽数の推移

単位 { 戸 数 : 戸
羽 数 : 千羽
比 率 : %

区 分	出 荷 戸 数	出 荷 羽 数	1 戸 当 たり 出 荷 羽 数	
実 数	平.14	3 365	586 045	174.2
	15	3 323	595 283	179.1
	16	3 240	589 957	182.1
対 前 年 比	平.14	99.4	103.2	103.8
	15	98.8	101.6	102.8
	16	97.5	99.1	101.7

イ 年間出荷羽数規模別出荷戸数・出荷羽数をみると、50万羽以上規模が157戸、1億7,930万羽で前年に比べそれぞれ4.7%、2.0%増加した。

全体に占める割合をみると、戸数で4.8%であるのに対し、羽数で30.4%となっている。

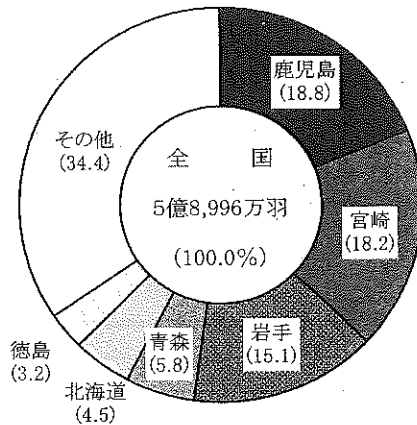
表13 ブロイラーの年間出荷羽数規模別出荷戸数・出荷羽数の推移

単位 { 戸数 : 戸
羽数 : 千羽
比 率 : %

区 分		計	5万羽未満	5～10	10～20	20～30	30～50	50万羽以上
出 荷 戸 数	平. 16	3 240	777	614	1 052	410	230	157
	15	3 323	814	622	1 103	393	241	150
	対前年比	97.5	95.5	98.7	95.4	104.3	95.4	104.7
	構成比							
出 荷 羽 数	平. 16	589 957	20 155	44 810	153 404	101 967	90 325	179 296
	15	595 283	21 355	45 895	160 672	97 808	93 794	175 759
	対前年比	99.1	94.4	97.6	95.5	104.3	96.3	102.0
	構成比							
	平. 16	100.0	3.4	7.6	26.0	17.3	15.3	30.4
	15	100.0	3.6	7.7	27.0	16.4	15.8	29.5

ウ 都道府県別出荷羽数割合をみると、鹿児島が18.8% (1億1,119万羽) と最も多く、次いで宮崎が18.2% (1億764万羽)、岩手が15.1% (8,884万羽) の順となっており、この3県で全国の5割を占めている。

図13 ブロイラーの都道府県別出荷羽数割合

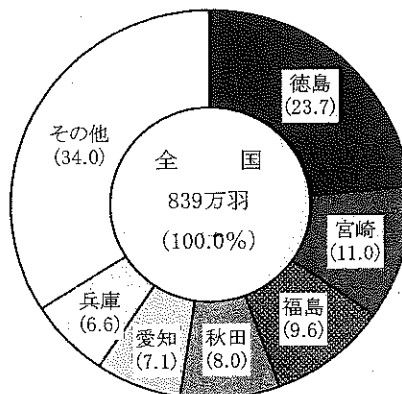


(2) その他の肉用鶏

肉用鶏のうち、ふ化後3か月以上の鶏（一般的に「地鶏」、「銘柄鶏」といわれる鶏）の処理羽数は839万羽、重量は2万5,530 tで前年に比べそれぞれ10.0%、9.8%減少した。

都道府県別出荷羽数割合をみると、徳島が23.7% (199万羽) と最も多く、次いで宮崎が11.0% (93万羽)、福島が9.6% (81万羽)、秋田が8.0% (67万羽)、愛知が7.1% (59万羽) の順となっている。

図14 その他の肉用鶏の都道府県別出荷羽数割合



(3) 廃鶏

処理羽数は8,619万羽、重量は15万3,111tで前年に比べそれぞれ6.2%、6.0%減少した。

(4) その他の食鳥

あいがも、うずらなどの鶏以外の処理羽数は266万羽、重量は5,105tで前年に比べそれぞれ2.7%、2.0%減少した。

2 プロイラーの飼養戸数・羽数（平成17年2月1日現在）

平成17年2月1日現在のプロイラーの飼養戸数は2,652戸、飼養羽数は1億252万羽で、前年に比べそれぞれ4.5%、2.3%減少した。1戸当たり飼養羽数は3万8,700羽で、前年に比べ2.4%増加した。

農業地域別割合で見ると、主産県である宮崎、鹿児島を中心とする九州の占める割合が最も高く、飼養戸数で39.9%、飼養羽数で47.1%となっており、次いで、岩手を中心とする東北が同じく17.0%、21.5%となっている。

表14 プロイラーの農業地域別飼養戸数・羽数

農 業 地 域	飼 養 戸 数			飼 養 羽 数		
	実 数	対前年比	構 成 比	実 数	対前年比	構 成 比
全 国	2 652	95.5	100.0	102 520	97.7	100.0
北 海 道	7	87.5	0.3	2 421	99.5	2.4
東 北	450	95.1	17.0	22 079	91.3	21.5
北 陸	22	91.7	0.8	759	101.1	0.7
関 東 ・ 東 山	204	88.3	7.7	5 099	97.3	5.0
東 海	146	88.0	5.5	4 190	90.9	4.1
近 畿	237	94.4	8.9	4 865	97.0	4.7
中 国	130	102.4	4.9	6 652	100.6	6.5
四 国	381	95.5	14.4	7 825	97.6	7.6
九 州	1 058	97.8	39.9	48 196	101.2	47.1
沖 縄	17	100.0	0.6	434	97.7	0.4

単位 { 飼養戸数 : 戸
飼養羽数 : 千羽
比 率 : %

3 製品生産量(と体・中ぬき及び解体品)

食鳥処理場における食鳥の製品生産量(と体・中ぬき及び解体品)は、108万7,762tで前年に比べ0.6%増加した。

このうち、大部分を占めるプロイラーについてみると、製品生産量は99万2,462tで前年に比べ1.0%増加した。これを処理別にみると、と体・中ぬきは6万3,258tで前年に比べ9.6%減少し、解体品は92万9,204tで前年に比べ1.8%増加した。

4 食鳥処理場数

食鳥を処理した全国の食鳥処理場数は650場で前年に比べ3.8%減少した。

これを食鳥の種類別にみると、その他の肉用鶏は171処理場で前年に比べ1.8%増加したものの、ブロイラーは191処理場、廃鶏は331処理場、その他の食鳥は92処理場で前年に比べそれぞれ3.0%、7.5%、3.2%減少した。

また、1食鳥処理場当たりの処理量は2,831tで前年に比べ3.9%増加した。

表15 食鳥処理場数及び1処理場当たり処理量（全国）

区 分	1) 食鳥処理場	食 鳥 の 種 類 別 処 理 場			
		ブロイラー	その他の肉用鶏	廃 鶏	その他の食鳥
処 理 場 数					
平. 16	650	191	171	331	92
15	676	197	168	358	95
対前年比 (%)	96.2	97.0	101.8	92.5	96.8
1 処理場当たり処理重量					
平. 16	2 831	8 673	149	463	55
15	2 724	8 351	169	455	55
対前年比 (%)	103.9	103.9	88.6	101.7	101.2

単位 { 処理場
処理重量 : t

注：1)は、食鳥を処理した実処理場数であり、1処理場で数種類の処理を行っている場合があることから、食鳥の種類別処理場数とは一致しない。

(参考) 卸売価格（食鳥市況情報）

図15 ブロイラー卸売価格（東京、中値、もも）の推移

